

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

1日

大安 斗

旧11月1日

日曜

妙法蓮華経

三誠三請重請重誠

さん かい さんしやう じゆうせい じゆうかい

「何度も繰り返し、真剣さが問われる」

弥勒菩薩の疑問に対して、お釈迦さまは容易に答えず「三誠三請重請重誠」の丁寧な儀式の後に、初めて説法を再開し、真意を明らかにされるのです。

『方便品』の場合と同じく丁寧な儀式をもって説法が始められるということは、次に説こうとする内容が極めて重要な意義を持っていることを暗示警告しています。

聴衆の真剣さが問われている場面です。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰
2024年

12月

2日

赤口 女
旧11月2日

月曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

み ろく い しゆ

弥勒為首

「聴衆を代表して説法を請う弥勒の慈悲」

そのとき、弥勒菩薩をはじめとした聴衆は皆、お釈迦さまの教えを聴くための十分な決心をして待っていました。

聴衆の一番前に立っていたのは弥勒菩薩です。

『序品』でも、お釈迦さまの説法の前に起きた様々な奇瑞に疑問を抱き、問いを發したのは弥勒菩薩です。

聴衆を代表してお釈迦さまに説法を請う弥勒菩薩の大きな慈悲を表しています。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

3日

先勝 虚

旧11月3日

火曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

によらい ひみつ

じんずうしりき

如来秘密 神通之力

「如来の奥深く限りない力が周囲に及ぼす働き」

「如来」とは、常に私たちを共にある永遠の命を持つ仏さまのことです。

法華経を説いているお釈迦さまは、この永遠の命を持つ仏さまが人間として、この世に出現された姿なのです。

「秘密」とは、奥深く限りないこと。

「神通之力」とは、周囲に及ぼす働きのこと。

如来の奥深く限りない力が周囲に及ぼす働きによってすべての衆生が救われていくのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

4日

友引 危

旧11月4日

水曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

が じつ じょう ぶつ ち らい

我実成仏已来

「遙か昔から仏であったお釈迦さま」

お釈迦さまは数えることもできないほど遙か昔から仏であったと初めて打ち明けられました。昔から仏であった仏が、この地上に住む衆生を救うために、仮に国王の子として生まれ、修行し、悟り、法を弘めたのだと示されたのです。人としてのお釈迦さまの一生は、永遠のいのちの一部分にすぎないことが明示されました。私たちも前世・現世・来世につながるいのちの中で永遠の仏さまに守られているのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

5日

先負 室

旧11月5日

木曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

ご ひやくおく じん でん ごう

たと

五百億塵点劫の喩え①

「お釋迦さまが成仏した遥か遠い過去」

五百千万億那由他阿僧祇という膨大な数の三千大千世界を、擦りつぶして微塵とし、東方に向かい五百千万億那由他阿僧祇の国を過ぎるごとに一塵ずつ置き、この塵がすべてなくなったとして、どれほどの国があったか。そして塵を置いた世界と置かなかった世界をすべて擦りつぶした塵を一劫という時間の単位として、百千万億那由他阿僧祇劫より遠い過去にお釋迦さまが成仏したという話です。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

6

日

仏滅 壁

旧11月6日

金曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

ご ひやくおく じん でん ごう

たと

五百億塵点劫の喩え②

「久遠に渡り存在し続け、人々を救う仏」

五百億塵点劫は、お釈迦さまが久遠の過去に成道（悟りを開いて仏陀となられたこと）したことを人々に理解させるための喩えですから、実際の数字を表現してはおりません。すなわち、お釈迦さまはいつ仏に成ったのかを示すのではなく、本来仏として過去・現在・未来に渡り存在し続け、いつの時代においても、いずれの場所においても、人々を導き救う存在であり「久遠実成の仏」と称されています。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

7日

大雪

大安 奎

旧11月7日

土曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

か お とう ぼう

過於東方

「初めにさかのぼる」

「五百億塵点劫の喩え」に、東方に向かい国を過ぎるごとに一塵ずつ置くとあります。

「東方」は太陽が昇ってくる方角であり、初めにさかのぼるといふ意味があります。

そこでお釈迦さまがいつ成道したのかを探るために「東方」にさかのぼると表現されたのです。

ちなみに、「西方」は太陽が沈む方向であり、最後に落ち着く先が連想され、浄土教では阿弥陀仏の仏国土を「西方極楽浄土」としています。

妙法蓮華經如來壽量品第十六

爾時仏告諸菩薩。及一切大衆。諸善男子。汝等當信解。如來誠諦之語。復告大衆。汝等當信解。如來誠諦之語。又復告諸大衆。汝等當信解。如來誠諦之語。是時菩薩大衆。彌勒為首。合掌白仏言。世尊。唯願說之。我等當信受仏語。如是三白已。復言。唯願說之。我等當信受仏語。爾時世尊。知諸菩薩。三請不止。而告之言。汝等諦聽。如來秘密。神通之力。一切世間天人。及阿修羅。皆謂今釈迦牟尼仏。出釈氏宮。去伽耶城不遠。坐於道場。得阿耨多羅三藐三菩提。然善男子。我實成仏已來。無量無邊。百千萬億。那由佗劫。譬如五百千萬億。那由佗。阿僧祇。三千大千世界。假使有人。抹為微塵。過於東方。五百千萬億。那由佗。阿僧祇國。乃下一塵。如是東行。尽是微塵。諸善男子。於意云何。是諸世界。可得思惟校計。知其數不。彌勒菩薩等。俱白仏言。世尊。是諸世界。無量無邊。非算數所知。亦非心力所及。一切聲聞。辟支仏。以無漏智。不能思惟。知其限數。我等住。阿惟越致地。於是事中。亦所不達。世尊。如是諸世界。無量無邊。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

8日

赤口 婁

旧11月8日

日曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

いっさいししょうもん

一切声聞

ひやくしぶつ

辟支仏

いむろち

ふのうしゆい

以無漏智

不能思唯

「二乗の無漏智では理解できない」

声聞・辟支仏（縁覚）の二乗は小乗の教えを学び、世の中を無情と感じ、世間の迷える人と関わることなく、自らの煩惱を減することによって「無漏智」を得ていました。

その「無漏智」を以て考えても、五百億塵点劫の喩えを理解することはできません。

自分の利害得失をすべて捨て、人のために尽くすことだけを考える仏さまの智慧を以てしか理解できないことなのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

9日

先勝 胃

旧11月9日

月曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

阿あ唯ゆい越おつ致ち

「不退転の心」

「阿唯越致」とは、不退転の意。

凡夫は信心が後戻りしないように決意しても誘惑に負け行ったり来たりを繰り返すものです。

不退転の境地にいる声聞・辟支仏にも、五百億塵点劫の喩えを理解できませんでした。

ちなみに、法華経の他の箇所に出てくる「阿鞞跋致（あびばっち）」は同意で、仏教の伝搬ルートの違いから、発音や音写の表記が変わったといわれています。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

10日

友引 昴

旧11月10日

火曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

しよ ぜん なん し

諸善男子

「仏に成ろうと止まることなく努める者」

仏教では、不完全な状態から完全な状態に向かうのが「善」で、その逆が「悪」といわれます。もつと善くなるのができるのに、いい加減な所で止まっているのも「悪」とみなされます。仏に成ることを目指して、止まることなく歩み続ける者を、お釈迦さまは「善男子」と呼びかけて教えをお説きになったのです。仏に成ろうとする強い決心がある者でなければ、真実の教えを理解できないといえるのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

11

日 水曜

先負 畢

旧11月10日

妙法蓮華経如来寿量品第十六

復過於此

「また此れに過ぎたること」

「此れ」とは、五百億塵点劫に喩えられた無限の時間を指します。

お釈迦さまの寿命は「此れ」よりもさらに無限であることを示し、人間には考えが及ぶことのできないことを伝えていきます。

仏さまの教えは、私たちの想像を超越した絶対的なものであり、言葉では言い尽くせない世界で私たちが生かされていると信じることが大前提なのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

12日

仏滅 齋

旧11月11日

木曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

燃燈仏

ねん とう ぶつ

「身の回りを燈火のように照らす仏」

『序品』では、燃燈仏は最後の日月灯明仏の八王子の末子で、父の高弟である妙光（文珠の前身）に従って悟りを得て仏に成りました。

『寿量品』では、久遠の時の中において出現したお釈迦さまの分身仏として燃燈仏の名が登場します。

燃燈仏が、過去世において儒童菩薩（じゅどうぼさつ）に対して未来に釈迦牟尼仏となると授記をしたという『瑞応経』の説話があります。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

13日

大安 参

旧11月12日

金曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

によぜ かい い
如是皆以 方便分別
ほう べん ふん べつ

「かくの如く方便をもって分別される」

お釈迦さまは、遠い過去から遙か未来までの間に分身仏として出現し法を説いてきました。

本仏と分身仏の関係は、本体と鏡に映った姿のように同じ思いを持って同じ教えを説きます。

多くの仏さまが現れて、説くべき教えを説くと涅槃に入り姿を消します。

涅槃は人々に覚醒を促す慈悲によるものです。

さまざまな仏さまの出現も涅槃も、方便として識別されるものなのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

14日

赤口 井

旧11月13日

土曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

諸根利鈍

「教えを求めらる者の機根」

「諸根」とは、教えを求めらる者の五種の機根。

①信根：理解した教えを深く信じること

②精進根：信心が緩まないように励むこと

③念根：信じた教えを常に心に留めておくこと

④定根：信心を変えない決心をすること

⑤慧根：仏の智慧を供える努力をすること

仏さまは私たちの諸根の利鈍を見極めて、それぞれにふさわしい教えを説いてくださいます。

私たちも常に五根を意識して努めましょう。

妙法蓮華經如來壽量品第十六

彌勒菩薩等。俱白仏言。世尊。是諸世界。無量無辺。非算數所知。亦非心力所及。一切声聞。辟支仏。以無漏智。不能思惟。知其限數。我等住。阿惟越致地。於是事中。亦所不達。世尊。如是諸世界。無量無辺。爾時仏告。大菩薩衆。諸善男子。今當分明。宣語汝等。是諸世界。若著微塵。及不著者。盡以為塵。一塵一劫。我成仏已來。復過於此。百千萬億那由他。阿僧祇劫。自從是來。我常在此。娑婆世界。説法教化。亦於余処。百千萬億。那由他阿僧祇國。導利衆生。諸善男子。於是中間。我說然燈仏等。又復言其。入於涅槃。如是皆以。方便分別。諸善男子。若有衆生。來至我所。我以仏眼。觀其信等。諸根利鈍。隨所応度。处处自説。名字不同。年紀大小。亦復現言。當入涅槃。又以種種方便。説微妙法。能令衆生。發歡喜心。諸善男子。如來見諸衆生。樂於小法。德薄垢重者。為是人

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

15日

先勝 鬼

旧11月15日

日曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

ぎよう お しょう ぼう とく はくく じゅう しゃ

樂於小法 徳薄垢重者

「小法を樂(ねが)つて、徳薄く垢重い者」

人間には苦勞を厭う不精な心があります。

より善いものを求めて努力をしても、もうこの辺でよいと諦めてしまいがちです。

自らを軽んじて徳が薄く、煩惱の垢が重い者となつてはいないでしょうか。

そのような者に仏さまは、いきなり深い教えを説くことなく、少しずつわかりやすい事例を示し、煩惱の垢を落としながら、ともに歩みを進めてくださるのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

16日

友引 柳

旧11月16日

月曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

ねんが じつじょうぶつち らい くおん にやくし

然我実成仏已来。久遠若斯

「私が仏と成ったのは久遠の遥か昔である」

お釈迦さまはインドの菩提樹下で初めて悟りを得たとされていますが、実は五百億塵点劫の久遠の過去世に成仏し、それ以来常に娑婆世界にあって人々を教化してきたことを、ご自身のお言葉で示している部分です。

インドに生まれたお釈迦さまは、人々を救うために人間として仮の姿となって現れたのです。久遠の昔から仏であったお釈迦さまを「本仏」、人間としてのお釈迦さまを「迹仏」といいます。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

17

日

先負 星

旧11月17日

火曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

ろく わく じ げん

六惑示現

「仏さまは六つの方法で導く」

①ある時には仏の姿で説く ②ある時には他の姿で説く ③ある時には仏の姿で導く ④ある時には他の姿で導く ⑤ある時には仏の行いを示す ⑥ある時には仏以外の行いを示す
仏さまは相手の状況によって、六つの方法で説き導いてくださるのです。
仏教以外の宗教の神さまや教祖などを「他の姿」ととらえ、それらを統一するのが久遠本仏であるお釈迦さまなのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

18日

仏滅 張

旧11月18日

水曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

によらいによじつちけん さんがいしそう

如来如実知見 三界之相

「如来は三界の相を實の如く知見す」

「三界」とは、衆生が生死を繰り返しながら輪廻するところの ①欲界（欲望に囚われる世界）

②色界（物質に囚われる世界） ③無色界（精

神的条件のみで生存する世界）の三つの世界。

「三界を實の如く見る」とは、ありとあらゆるもののすべての本当のありさまを見るところのこと。

仏さまの見方では、肉体の死は変化であるけれど、存在そのものは変化しないのだというこの文が葬儀の引導文で用いられます。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

19日

大安 翼

旧11月19日

木曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

むうしようじにやくたいにやくしゆつ

無有生むうじつひこ死

若退若出ひじつひこ

亦無在世やくむざいせ

及滅度者ぎゆうめつどしゃ

非実非虚ひじつひこ

非如非異ひによひい

不如三界ふによさんがい

見於三界けんのおさんがい

如斯之事によしし

如来明見にょらいみしようけん

「如来は真実の相を見る」

生死によって存在が滅するわけではないと言

い、「実(変化しない)」でも「虚(変化する)」でもな

く、「如(常住)」でもなければ「異(不常住)」でもな

いと言われると大きな矛盾のように感じます。

私たちの肉体は仏さまの永遠のいのちの一部で

すが、肉体そのものは永遠ではありません。

肉体の死という変化を受け入れつつ、その人が

生きた事実が世界を構成している大切なもので

あるという仏さまの見方を示しています。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

20日

赤口 軫

旧11月20日

金曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

い しょしゅじょう

以諸衆生

う しゅじゅしろう

有種種性

しゅじゅよく

種種欲

しゅじゅぎよう

種種行

しゅじゅおくそう

種種憶想

ふんべっこ

分別故

「人には種々の性格・欲望・憶想・分別がある」

人にはそれぞれ種々の性格があり、欲望があり、行いがあり、経験や憶測・利害得失によつてもものを分けて考えるものです。

そのまま放置しておく、お互いに迷い、世の中が紛糾することになってしまいます。

そこで仏さまは、人々が善い事を考え、善い行いをして幸せな世界を築くようにと、過去の事例や種々の喩え話を適切な言葉を用いて、導いてくださるのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

21日

冬至

先勝 角

旧11月21日

土曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

が ほんぎょう ぼさつ どう しよじょうじゆみょう

我本行菩薩道 所成寿命

「私が菩薩行で得た寿命は未だ尽きることはない」

仏典にはお釈迦さまの多くの前世の物語が説かれていきます。

お釈迦さまが人間界に出現し、菩薩行を積み、人々を救い導くことに尽くした報いとして得た寿命は尽きることはないと言われています。

この寿命は、久遠本仏の無限の過去から無限の未来までの寿命とは別のものです。

多くの善事、善行を積み重ねることの大切さを表している経文です。

妙法蓮華經如來壽量品第十六

諸善男子。如來見諸衆生。樂於小法。德薄垢重者。為是人說。我少出家。得阿耨多羅三藐三菩提。然我實成仙已來。久遠若斯。但以方便。教化衆生。令入仙道。作如是說。諸善男子。如來所演經典。皆為度脫衆生。或說己身。或說他身。或示己身。或示他身。或示己事。或示他事。諸所言說。皆實不虛。所以者何。如來如實知見。三界之相。無有生死。若退若出。亦無在世。及滅度者。非實非虛。非如非異。不如三界。見於三界。如斯之事。如來明見。無有錯謬。以諸衆生。有種種性。種種欲。種種行。種種憶想。分別故。欲令生諸善根。以若干因緣。譬諭言辭。種種說法。所作仙事。未曾暫廢。如是我成仙已來。甚大久遠。壽命無量。阿僧祇劫。常住不滅。諸善男子。我本行菩薩道。所成壽命。今猶未盡。復倍上數。然今非實滅度。而便唱言。當取滅度。如來以是方便。教化衆生。所以者何。若仙久住於世。薄德之人。不種善根。貧窮下賤。貪著五欲。入於憶想。妄見網

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

22日

友引 亢

旧11月22日

日曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

によらい いぜ ほう べん きょう け しゅじょう

如来以是方便 教化衆生

「如来、是の方便をもって衆生を教化す」

お釈迦さまは、衆生を教え導くためにこの世を去る(滅度する)と言われました。

いつでもお釈迦さまに会って教えを聞くことができると思うと聞こうという心が起きないもの、始終そばにいて慣れてしまおうとありがたさを感じなくなるものです。

「是の方便」とは、時期が来れば姿を消すこと。

方便で涅槃を見せるのも釈迦さまが私たち衆生を思う大慈悲なのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

23日

天皇誕生日

先負 氏

旧11月23日

月曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

しよぶつ しゅっせ

諸仏出世

なんか ちぐう

難可値遇

「仏にこの世でめぐり合うのは難しい」

無量百千万という長い年月の間によく会えるか否かというくらい仏さまに巡り会うのは難しいことです。

容易に会えないとなると、仏さまの教えを渴望し、いざ出会えたときには本気で教えを聞き、善行を積み重ねていくことでしよう。

そのためにお釈迦さまも入滅して、姿を消して見せたのです。

今、仏法に出会えたのは稀なことなのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

24日

仏滅 房

旧11月24日

月曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

かい じつ ふう こ

皆実不虚

「衆生を導くための真実であり虚偽はない」

お釈迦さまだけでなく、すべての仏さまが同じように菩薩道を歩み、悟りを得て、教えを説いた後に世の中を去りました。

仏さまがそばにいるとかえって信心が緩むので進んで教えを求めらるるようになさるるためです。

滅度を示すのは、衆生を悟りに至らせ救うための仏さまの御心から出た真実であり、決して虚偽ではないということです。

私たちは疑わずに信心に励めばよいのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

25日

大安 心

旧11月25日

水曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

ろういじし たと

良医治子の喩え①

「良医の子供たちが誤って毒を飲む」

良医(名医)である父の不在中、多くの子どもたちは戯れて毒薬を飲み、苦しんでいました。

父は帰ると驚き、苦しむ子どもたちを救うために、あらゆる妙薬を調合し、色も香りも味わいも良い、とっておきの良薬を与えました。

「この良薬を飲めば、すぐにその苦しみから逃れることができる」という父の言葉を聞き、本心を失わない者は、この薬を服し、たちまちに病が癒えていきます。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

26日

赤口 尾

旧11月26日

木曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

ろ う い じ し た と

良医治子の喩え②

「父が死んだと方便を用いて良薬を飲ませる」

本心を失ってしまった子供たちは、父に助けを求めますが良薬を飲もうとしません。

そこで父は方便を設け、「この良薬をここに置いておく。自分たちで取って飲みなさい。治らないなどと心配することはない」と言って他国へ行き、そこから使いを遣わして子どもたちにも「お父さんは亡くなりました」告げさせました。これを聞いて子供たちは、平常心を取り戻し、良薬を服すと、病は癒えていきました。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

27

日

先勝 箕

旧11月27日

金曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

ろういじし

たと

良医治子の喩え③

「末法の衆生を救うための良薬」

子供たちは平癒し、父も帰り共に喜びました。

良医(父)はお釈迦さま、本心を失った子どもは私たちが末法の衆生を指しています。

私たち末法の衆生を救うために特別に用意された良薬が「お題目」であり、このお題目の良薬を飲ませるために、久遠のお釈迦さまから遣わされた使いが「地涌の菩薩」です。

久遠のお釈迦さまの智慧と慈悲、巧みな方便とといった偉大な力が示されています。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

28日

友引 斗

旧11月28日

土曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

しょうげ ふしんしゃ そくとうだあくどう

或失本心 或不失者

「本心を失った者と正気を保っている者」

毒を飲んだ子供の中には本心を失った者もいれば、正気を保っている者もいました。みな父親の顔だけは認識できて治療を頼みます。私たち衆生も迷いの中で本心を失っている者も正気を保っている者もあります。本心を失い、仏さまの教えを受け入れようとせずさらに深い迷いの中に陥る人がいます。正気を保ち、仏さまの教えを正しく理解し、迷いを払う人もいます。

妙法蓮華經如來壽量品第十六

如來以是方便。教化衆生。所以者何。若仏久住於世。薄徳之人。不種善根。貧窮下賤。貪著五欲。入於憶想。妄見網中。若見如來。常在不滅。便起隱恣。而懷轡怠。不能生於。難遭之想。恭敬之心。是故如來。以方便説。比丘當知。諸仏出世。難可值遇。所以者何。諸薄徳人。過無量。百千萬億劫。或有見仏。或不見者。以此事故。我作是言。諸比丘。如來難可得見。斯衆生等。聞如是語。必當生於。難遭之想。心懷恋慕。渴仰於仏。便種善根。是故如來。雖不実滅。而言滅度。又善男子。諸仏如來。法皆如是。為度衆生。皆実不虚。譬如良医。智慧聰達。明練方藥。善治衆病。其人多諸子息。若十。二十。乃至百數。以有事縁。遠至余国。諸子於後。飲佗毒藥。藥發悶乱。宛転于地。是時其父。還來歸家。諸子飲毒。或失本心。或不失者。遙見其父。皆大歡喜。拜跪問訊。善安穩帰。我等愚痴。誤服毒藥。願見救療。更賜壽命。父見子等。苦惱如是。依諸經方。求好藥草。色香美味。皆悉具足。擣篩和合。与子令服。而作是言。此大良藥。色香美

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

29日

先負 女

旧11月29日

日曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

父見子等 苦惱如是

「父は苦しむ子供たちを見て薬を調合した」

父親は、毒を飲んで苦しんでいる子供たちのために薬を調合して与えました。

『方便品』の「衆生は悉く我が子である」と同じように、貪瞋痴の三毒にまみれ苦しんでいる私たちを自らの子どもとして慈しみ、救いの手を指し伸ばしてくださいだったので。

病が重くなり、人の心が險悪になって、世の中が乱れてくると、より良い薬を調合しなければならぬのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

30日

仏滅 虚

旧11月30日

月曜

妙法蓮華経寿量出品第十六

とう し わ ごう
擣 籩 和 合

「不要な物を捨て、純粋な要素だけを調合する」

「擣」は、臼でつくの意、「籩」は竹や銅線などで底の目を粗く編んだ大形の篩（ふるい）。

「擣籩和合」は、薬草を臼でついて、ふるいにかけて、粉にして調合すること。

薬草を砕いて篩って、不要な物を捨て、本当に役立つ要素だけで薬を調合するように、方便が混ざらない仏さまの御心のままに説かれた真実の教えを説くことの喩えです。

そのように調合された良薬が法華経なのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

12月

31日

赤口 虚

旧12月1日

火曜

妙法蓮華経寿量出品第十六

此大良薬 色香美味

「色も香りも味も良い大良薬」

父親が調合した薬は、色も香りも味もとても良いものでした。

本当の信心が得られれば、仏さまを有難いと思っただけではなく、万事が愉快で、常に心に悦びを感じ過ごすことができます。

その心が日々の行いにも現れ、世の中にも良い影響を及ぼします。

色も香りも味も良い薬のように完全無欠の教えが法華経なのです。

妙法蓮華經如來壽量品第十六

譬如良醫。智慧聰達。明練方藥。善治衆病。其人多諸子息。若十。二十。乃至百數。以有事緣。遠至余國。諸子於後。飲佗毒藥。藥發悶亂。宛轉于地。是時其父。還來歸家。諸子飲毒。或失本心。或不失者。遙見其父。皆大歡喜。拜跪問訊。善安穩歸。我等愚痴。誤服毒藥。願見救療。更賜壽命。父見子等。苦惱如是。依諸經方。求好藥草。色香美味。皆悉具足。擣篩和合。与子令服。而作是言。此大良藥。色香美味。皆悉具足。汝等可服。速除苦惱。無復衆患。其諸子中。不失心者。見此良藥。色香俱好。即便服之。病尽除愈。余失心者。見其父來。雖亦歡喜問訊。求索治病。然与其藥。而不肯服。所以者何。毒氣深入。失本心故。於此好色香藥。而謂不美。父作是念。此子可愍。為毒所中。心皆顛倒。雖見我喜。求索救療。如是好藥。而